

大坂城跡発掘調査（OS11-10次）

現地説明会資料

2011年12月24日(土)

大阪市教育委員会・(財)大阪市博物館協会 大阪文化財研究所

■ 今回の発見

大阪市教育委員会と(財)大阪市博物館協会 大阪文化財研究所は、特別史跡大坂城跡の発掘調査を2011年10月から実施してきました。今回の調査地は、大坂城内の山里丸に位置します。天守閣の北に位置するこの場所には、江戸時代には大坂城の警備を担う「山里加番」の屋敷が置かれていました。また雁木の上段には、外周の防御施設である「多聞櫓」などが巡らされていたことがわかっています。

今回の調査では、多聞櫓を構成する礎石や、雁木を検出したほか、遅くとも寛政年間(1789~1800年)には存在し、戊辰戦争(1868~1869)まで機能した排水のための大規模な集水枡を検出しました。集水枡は、大坂城下町跡など市内の他の場所では見られない、大坂城内ならではの大規模な施設です。

今回の発掘調査でこうした成果によって、江戸時代の大坂城の構造をまた1つ明らかにすることができました。

■ 詳しい調査成果

今回は、山里丸東半の北辺と東辺に合計4箇所の調査区を設定して発掘調査を進めています。以下では、調査区ごとに概要を説明します(図1)。

【C・D区】：この地区では、江戸時代の大坂城の遺構が良好に残っていました(図2)。まず雁木上段では、多聞櫓を構成する礎石群を検出しました。これらの礎石は19世紀前半の陶磁器を含む多量の焼けた瓦で覆われており、また礎石には木材が焼けた痕跡が残されていました。文献史料にあるとおり慶応4(1868)年の戊辰戦争で山里丸が焼失したこと、そしてその際に起こった火災の凄まじさを示しています。また礎石の上のせる土台の痕跡が確認でき、多聞櫓の床下構造を把握することができました(右ページの図参照)。

雁木よりも内側では、江戸時代のごみ穴などのほか、大規模な集水枡を検出しました。この集水枡は石組みで、内法が南北3.9m、東西3.0mの長方形をしています。壁面に使用されている石材は、最大のもので一辺150cm、高さ80cmもあります。深さは2.5mで、底には板が敷かれていました。また、北西と南西の角には水路が接続し、東壁面には石組の排水路が取り付けられており、その先の石垣には排水口が設けられています。こうした構造から、この集水枡は城内の水をいったん溜めて砂や泥を沈殿させ、石垣の外へ排出するための施設であると考えられます。

集水枡の時期については、寛政年間(1789~1800年)に描かれた絵図に「沙留」(すなどめ/すなだまり)として四角い構造物が描かれており(図4)、今回検出した集水枡はこの「沙留」であると考えられます。また、排水路を設置するために掘られた穴からは、19世紀前半の陶磁器が出土しています。そして、集水枡は戊辰戦争で焼けた瓦によって埋められていました。したがって、この集水枡は遅くとも1800年には存在し、19世紀前半に改修を受け、戊辰戦争後に廃絶したことがわかります。

雁木部分では、裏込めに瓦が混じっており、江戸時代間に雁木の積み直しが行われた可能性があります。また、雁木の下に排水路が通るD区では、雁木を補強するため、その裏に石垣が組まれていました。

【A・B区】：山里丸の北辺に設定したこの2つの調査区では、第二次世界大戦時の爆撃で江戸時代の遺構が大きく破壊されていました(図3)。雁木上段にあった多聞櫓は完全に失われており、雁木も最下段の石材のみが残存していました。そして、現在見ることのできる雁木は戦後の大阪城修復工事に際して積み直されたものであるとわかりました。

用語解説

■ **大坂城**：大阪市を南北に延びる上町台地の北端、自然地形では市内で最も標高の高い場所に位置する。現在は、石垣・櫓・門といった江戸時代の建造物のほか、昭和6(1931)年に復興された天守があり、約74haが国の特別史跡に指定されている。

■ **山里丸**：本丸の北に位置する一段低い郭。豊臣期には茶室などが設けられ、秀吉が千利休や津田宗及などの茶人と風雅な茶会を楽しんだと言われている。大坂夏ノ陣に際しては、秀吉の側室である淀殿と息子の秀頼が山里丸で自刃したと伝えられている。江戸時代には、加番大名(次項参照)とその家臣が詰める屋敷が設けられていた。

■ **山里加番**：江戸時代には、大坂城付の役人として、大坂城代をはじめ定番・大番・加番などが置かれた。加番の任期は1年で、加番4名のうち山里丸に加番小屋があった山里加番は3万石級、中小屋・青屋口・雁木坂の加番は1~2万石級の大名から選ばれた。

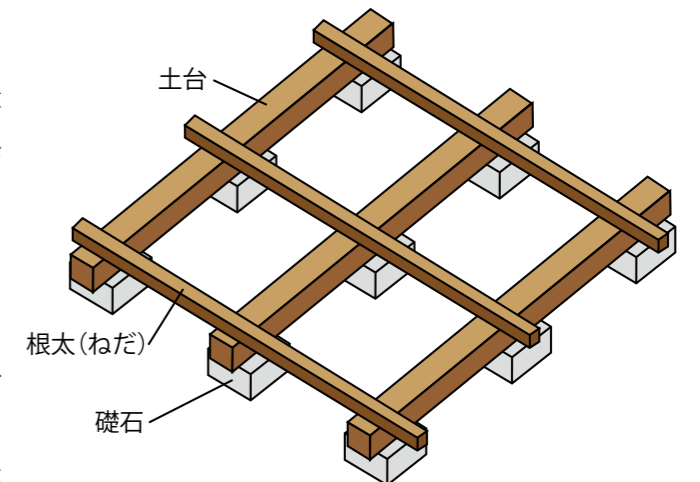
■ **多聞櫓**：「多聞(多門)」とは石垣の上に造られた長屋状建物のこと。石垣と塀をそろえた城壁としての機能と、兵士が詰めたり武器を納めたりする櫓・蔵としての機能を持っていた。江戸時代の大坂城には多くの多聞櫓があったが、現存するのは大手口枡形の石垣上に建つものだけである。

■ **雁木**：階段状の構造物。群れて飛ぶ雁のようにジグザグした形から呼称される。

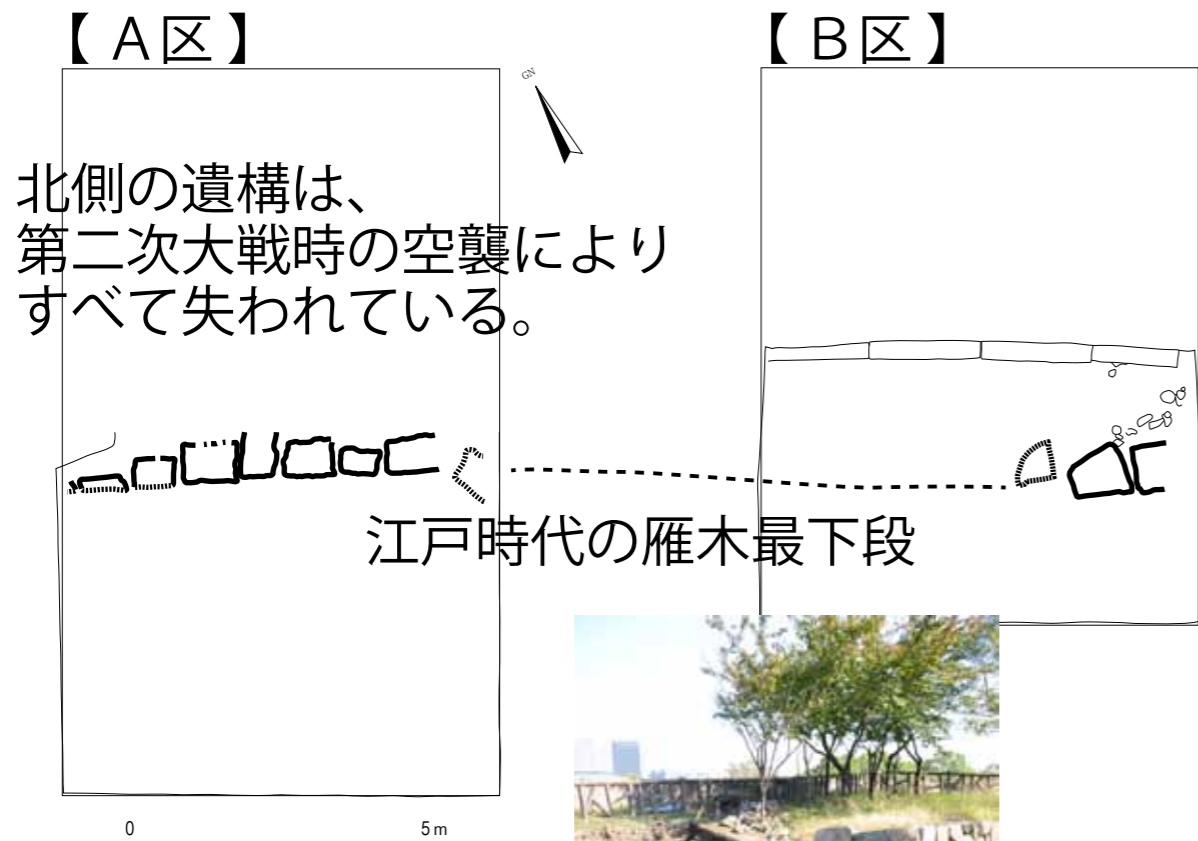
■ **裏込め**：壁の安定性を高めるために、背面に砂利や栗石を入れること。また、その砂利や石。

【関係年表】：太字は山里丸に関係するできごと

慶長二十年(1615) (元和元年)	大坂夏の陣で大坂城落城し、 全城焼亡、豊臣氏滅ぶ
五年(1619) 六年(1620) 八年(1622)	松平忠明大坂城主となり、焼跡整理と 市街地の復興に努める 幕府、大坂を直轄地とする 將軍秀忠、第1期の再建工事を始める 第1期工事完了
元和十年(1624) 寛永三年(1626) 五年(1628)	第2期工事開始(山里丸含む) 大天守竣工、第2期工事完了 第3期工事開始(翌年完了)
万治三年(1660)	青屋口焰硝蔵に落雷、本丸御殿、 天守など破損、死者多数
寛文五年(1665) 弘化二年(1845)	天守の鯨に落雷し、全焼する 大坂・兵庫・西宮・堺町人達の御用金で、 大修理工事開始(ほぼ全面的な修理)
嘉永元年(1848)	大天守は欠くが、 再築当初の旧観を取り戻す
安政五年(1858)	大坂城大修理完成する
明治元年(1868)	幕府軍、鳥羽伏見の戦いに敗れて 大坂城に拠る。全城ほとんど焼失する
四年(1871) 十八年(1885)	鎮台本部となる 和歌山城二の丸御殿(紀州御殿)を 本丸に移築する
二十一年(1888) 昭和五年(1930) 六年(1931)	第四師団司令本部となる 天守閣復興工事始まる 天守閣復興する
十七年(1942)	軍により天守閣への入場禁止、山里丸 に軍宿営施設が立ち並び 空襲により京橋口多聞、二番、三番、 伏見櫓、門等焼失する
二十年(1945)	GHQによる接收
二十四年(1949) 二十八年(1953)	天守閣への一般入場再開 一・六番櫓修復工事開始、 以来各所の修復あいつぐ
三十三年(1958) 三十四年(1959)	山里丸北東石垣修理工事(～59) 大坂城総合学術調査実施し、 本丸地下に石垣を発掘する
六十年(1985)	配水池の南側で豊臣時代大坂城本丸の 詰ノ丸外郭外廻り石垣を発掘する



多聞櫓床下構造の模式図



0 5m
図3 A・B区で見つかった遺構



B区でわずかに残った雁木→
(手前の大きな穴は爆弾のあと、南西から)

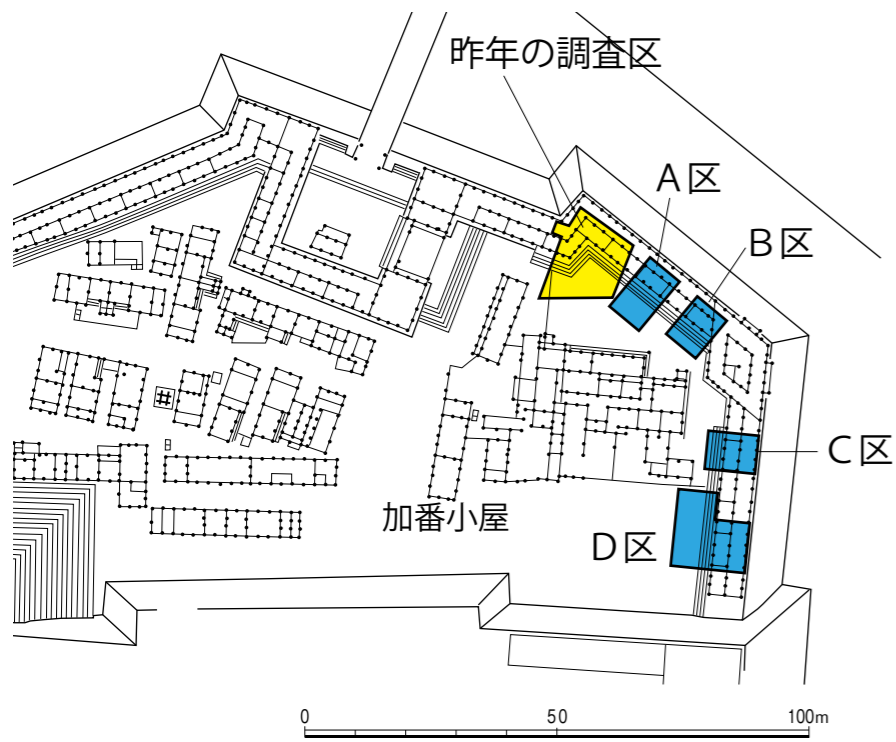


図1 幕末の山里丸と調査区の配置

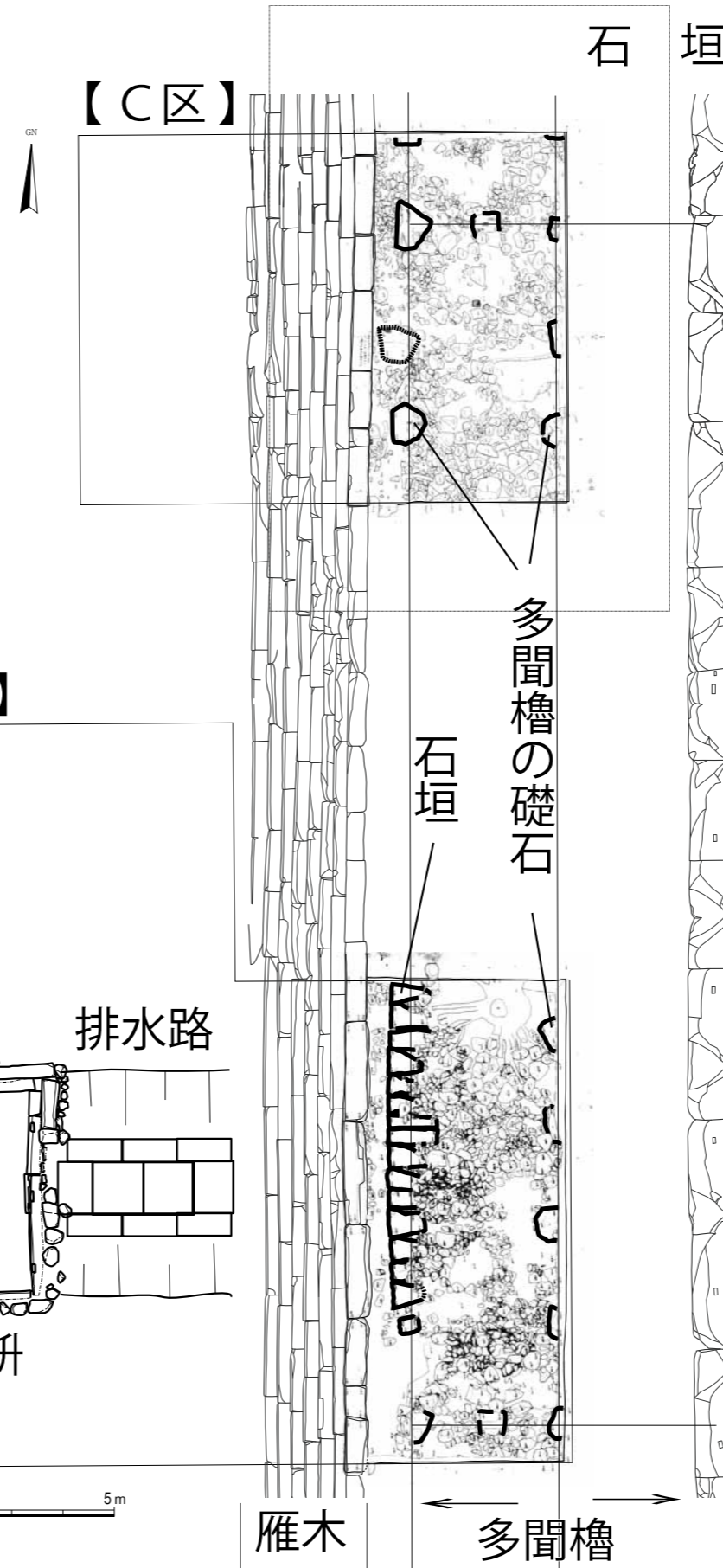


図2 C・D区で見つかった遺構



↑ 大手口に現存する多間櫓の内部



↑ D区で見つかった集水枡と排水路(西から)

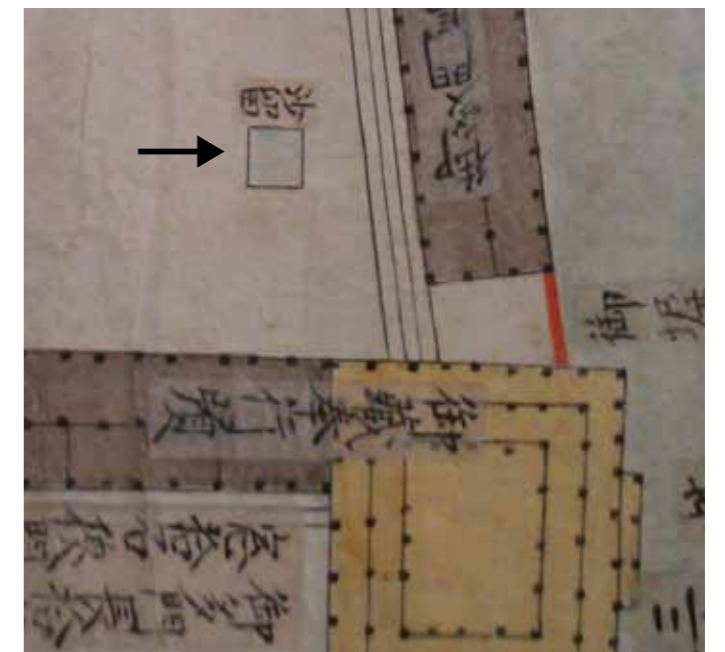


図4 絵図にみえる「沙留」(上が北、大阪城天守閣所蔵資料より)